

アシナへとアシノウレ

——万葉集卷二・一二八歌にみられる『遊仙窟』の影響——

西 嶋 佑太郎

一、はじめに

万葉集卷二の一二六～一二八歌は、大伴田主が「風流土」であるかどうかを詠んだ石川女郎と大友田主との間の贈答歌である。従来この歌群については、犬塚旦（一九五七）が「風流」の語義を①政教的倫理的、②文雅的美的、③好色的の三種（同五七頁）に整理したのを受けて、同じ「風流」の語を石川女郎は一二六歌で③の意味で用い、大伴田主は一二七歌で①の意味で用いた、といった語義の相違を軸として解釈されてきた（秋山虔（一九八四）など）。また長大な左注の典拠について小島憲之（一九八八）をはじめとした研究の蓄積がある。これらの先行研究は、直接「風流土」を詠み込み、長大な左注のある一二六、一二七歌を中心に据えたものであり、対して一二八歌は解釈の空白域となっている。森本治吉（一九三七）は一二八歌について、「学徒の間では、第四句の難訓を以て著名」「永い間の難解歌」（いずれも二二頁）とし、現在でも訓や解釈は一定しているとはいいたい。

三宅香帆（二〇一九）は、石川女郎と大伴田主の行動の典拠として

『文選』と『遊仙窟』を挙げ、二つの典拠をもとに一二六、一二七歌における「風流土」像のずれの解釈を示した（後述）。本稿は、一二八歌についても『遊仙窟』を典拠とした解釈が成立しうることを示す。

以下、第二節では先行研究の解釈を元に問題の所在を明らかにし、第三節では、解釈に関連する一二八歌の第三句、第四句の訓異同について検討する。第四節では典拠と考えられる『遊仙窟』の詩をとりあげ、一二八歌が一二六、一二七歌とどのように関連付けられるのかについて検討する。

二、問題の所在

はじめに、当該歌群の歌と左注を掲げる。^①

石川女郎贈大伴宿禰田主歌一首 即佐保大納言大伴卿之第二子。母曰巨勢朝臣^二也。

遊士跡^{みよびせと} 吾者聞流乎^{われはきけるを} 屋戸不^{やどか}借^ず 吾乎還利^{われをかへせり} 於曾能風流土^{おそのみやびを}

(2・一二六)

大伴田主、字曰「仲郎」。容姿佳艶、風流秀絶、見人聞者、靡不嘆息也。時有石川女郎。自成「双栖之感」、恒悲「独守之難」。意欲「寄書」、未逢「良信」。爰作「方便」而似「賤軀」、已提「燭子」而到「寢側」、啞音蹠足、叩「戸」諂曰、「東隣貧女、將取火来矣。於是仲郎暗裏非「識」冒隱之形、慮外不堪「拘接之計」。任念取火、就跡歸去也。明後、女郎既恥「自媒之可」愧、復恨「心契之弗」果。因作「斯歌」、以贈「謔戲」焉。

大伴宿柅田主報贈歌一首

遊士^{みやびをに}尔^{われはありけり} 吾者^{みづか}有家里^{やど} 屋戸^{やど}不^な借^{かへし} 令還^{かへし}吾曾^{われそ} 風流士^{みやびをにはある}者有^は (2・

一二七)

同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首

吾聞^{わがきこし}之^み 耳^{みみ}尔^{よくに}好^{あし}似^{のうれ} 葦若末^{あしわわがせ}乃^{つとめたふべし} 足痛^{あしやわがせ}吾勢^{つとめたふべし} 勤多^{つとめたふべし}扶倍思^{つとめたふべし} (2・一

二八)

右、依「中郎足疾贈此歌」問訊也。

一二六歌左注によると、「容姿佳艶、風流秀絶」である大伴田主に對して、石川女郎が「双栖之感」を抱き、賤しい老女に扮して「東隣貧女」と称し、土鍋を下げて火をもらう名目で訪ねた。単に火をとらせで帰ってしまった大伴田主に對して、石川女郎は「風流士なのに帰した」ことをからかう一二六歌を詠み、對して大伴田主が「風流士だから帰した」と述べる一二七歌を詠んだ。これに石川女郎がさらに返したのが一二八歌である。この一二八歌の解釈は、石川女郎が悔しさを

ら、中郎（大伴田主）が足に疾患を抱えていたことをとりあげて、「お大事になさってください」と揶揄をこめて返答するものと解釈するものが多い。「足疾」があるから思うままに動けないので帰されたという合理化を述べたとするものもある（沢瀉久孝『万葉集注釈』一二八頁）。三宅（二〇一九）は、一二六、一二七歌の石川女郎と大伴田主との間の「風流士」のずれについて、それぞれが基づく典拠がずれているという解釈を示した。すなわち石川女郎の行動には『文選』と『遊仙窟』の二つの典拠が存在し、これに對して大伴田主は『文選』のみに基づいて返した、とするものである。万葉集卷二の時点で『遊仙窟』が利用されたかという成立論の問題と分けて、この歌群をテキストとして考察するときに、三宅氏の解釈は、左注の典拠と「風流士」のずれの両方を説明できるため、作業仮説として有効である。歌群の他の箇所にも『遊仙窟』で説明できる点があれば、三宅氏の作業仮説はさらに補強されると考えられる。本稿では、一二八歌の訓異同を従来と異なる角度からとらえたうえで、一二八歌も『遊仙窟』を典拠とすることについて検討してみたい。

三、「葦若末」「足痛」の訓異同

三―一、「葦若末」の訓

本稿では第三句の「葦若末」を「アシノウレ」と訓じるべきものと考ええる。以下に、本文異同と訓異同について検討する。

本文異同について、『校本万葉集』によると現存諸写本の多くは「葦

若末²」につくるが、天治本が「葦若末」、古葉略類聚抄が「葦若生」とする。諸注釈の大半は、契沖『万葉代匠記』（精選本、『契沖全集』巻一、四七一―四七四頁）が「小松之若末爾（コマツガウレニ）」（10・一九三七）を類例として引いたのをはじめとして、万葉集中の「若末」の用例をもとに「葦若末」とする。これについては稲岡耕二（一九八二）の調査があり、万葉集中の「若末」または「若末」の本文異同を調べ、ほとんどが「若末」であることから、「若末」が正しいとした。そして一二八歌については、「訓が不明の個所のため、いっそう誤りも甚だしかったのであらう」（二二頁）と考察した。本稿も稲岡氏の意見に従う。

訓異同について、『校本万葉集』によれば、諸写本のうち元暦校本、紀州本、廣瀬本、古葉略類聚抄など次点本は「アシノハ」と訓じ、西本願寺本、細井本、温古堂本、大矢本等の新点本が「アシカヒ」と訓じている。諸注釈では、仙覚『万葉集註釈』（仙覚全集七四頁）が古点の「アシノハ」を否定して「アシカヒ」と訓じ、契沖『万葉代匠記』（精選本）が巻十の「小松之若末爾（コマツガウレニ）」（10・一九三七）を類例として「アシノウレ」と訓じて以降、近現代の注釈は「アシカヒ」もしくは「アシノウレ」のどちらかで訓じられており、後者が優勢である。そこで以下に「アシカヒ」「アシノウレ」の二つの訓について検証する。

三―一―一、アシカヒ（アシカビ）

契沖『万葉代匠記』（精選本）以降、アシカビという訓に対して、記

紀のアシカビの例を引いて傍証とするようになる。

「如葦牙因萌騰之物而成神名、字摩志阿斯訶備比古遲神」（日本古典文学大系『古事記 祝詞』。傍線は筆者による。）

これについて土屋文明『万葉集私注』（新装版）では「葦芽、葦若末は同語をあらはすものと見るべきだ。枕詞であるから伝来ある語を用ゐたと見るのは穏当だ」（二二頁）とする。

またアシカビの訓を主張した沢瀉久孝『万葉集注釈』（普及版巻二、一二六―一二八頁）では、アシノウレとの比較を次の二点から述べる。

①「アシカビ」が一語であるのに対して、「アシノウレ」だと二語になる。一語の場合、語の前半をとって後ろにつながる傾向にあり（例…あしほ山 あしかるとがも（14・三三九一）、二語の場合、後半をとって後ろにつながる傾向にある（例…小松がうれの うれむぞは（11・二四八七））。

②枕詞の音数は五音が常態で、古くは四音が少なくない。その中で、六音のものはこのころまで見当たらない。そのためアシノウレノと読めば、中間に単独母音があるので、音調の点からは許されるとはいえ、当時としては異例である。

記紀の用例に関しては、「萌騰之物（萌え騰れる物）」という勢いよく成長するイメージが重ねられているこの語が、続く「足痛」にそぐわないという問題点が伊藤博ら『万葉集全注』（巻二、稲岡耕二担当、一一六―一一七頁）に指摘される。沢瀉の①に対して同じく『万葉集

全注』では、序詞のなかに「荒磯越し外行く波の外心」(11・二四三四)などの例があることを述べ、決定的な論拠としがたいとしている。沢瀉の②については成立論にかかわるため、これだけでは否定も肯定もできない。

三―一―二、アシノウレ

アシノウレの訓は諸写本には見られないものであるが、契沖『万葉代匠記』(精選本)以降、巻十の「小松之若末爾(コマツガウレニ)」(10・一九三七)などを類例として訓じられている。ウレを使用する歌は万葉集中に「小松之末爾」(2・二二八)、「小松之末由」(10・二三一四)、「小松之若末爾」(10・一九三七)、「子松末」(11・二四八七)などがあるが、「アシノウレ」は見られない。「若末」「末」の訓の類例を根拠として導出された訓であるが、中には橘守部『万葉集檜嬢手』(万葉集叢書第三輯、一一一頁)に「足患(アシノウレヘ)を葦末(アシノウレ)に兼ねたれば、必ずうれとよむべき也」とあるように、後続する句との関係から訓の補強を行うものがあつた。

ウレと読む場合、その意味内容は葦の若芽ではなく、成長した葦の先端部分となる。このことについて山田孝雄(一九五五)は、「末」「若末」がウレと読まれることを述べたうえで、一二八歌に言及し、「今、『葦牙』と『葦若末』との文字につきて意義の差を考ふるに「牙」は即芽と同字なれば、今いふ「め」なり。然るにわが考ふる「うれ」はその芽の生長したるものにして同日に断ずべからず」(二四二頁)とする。この場合、ウレには、アシカビのような「勢いよく成長」という記紀

のイメージは付帯しないと考えられる。

以上から、万葉集中に類例があり、「成長」のイメージが付帯しない「アシノウレ」と訓じるのが穏当と考えられる。「ウレ」自体に「柔らかさ」の含意はないが、「アシノウレ」となったときに、鹿持雅澄『万葉集古義』に「もと軟弱なるよしの言なれば、葦若末乃、といふよりの属に、よくかなへり」(四五二頁)、近藤芳樹『万葉集註疏』(二の上、三三二頁裏)に「若末とは若木若草の末のことにていと弱きゆゑになえなえとするを疾ありて足のなえくとしたるにたとへたるなり」とあるように、「アシノウレ」を採用する複数の注釈が、「アシノウレ」すなわち若い葉先が「弱々しい」ものであることを指摘している。このことから諸注釈と同様に「葦若末」には「柔らかさ」という含意を持ち、後続する「足痛」に関連するとみたい。

三―二、[足痛]の訓

本稿では第四句「足痛吾勢」の「足痛」を「アシナヘ」と訓じるべきものと考ええる。以下に、訓異同について検討する。

『校本万葉集』によると諸写本では、大矢本、陽明本が「アナヘク」、元暦校本が、「痛」を「イタ」とし、右に墨「アナヘク」、廣瀬本が「アシイタ」、紀州本が「アシイタ」、左に朱で「アナヘク」、京都大学本が楮で「アシイタ」「アシヒク」、古葉略類聚鈔が「アシイタル」、細井本が「アルヘク」と、多くの訓が錯綜している。

諸注釈ではさらに多く、計十三通りの訓が存在する。主たる論点は「痛」の訓であり、それによって「足」を「ア」「アシ」のどちらにす

るか、「痛」の訓を連体形、連用形どちらにするかが分かれていく。十三通りの訓は、「痛」の訓によってAイタ系、Bナヘ系、Cナヤム系、Dヒク系、Eその他の大きく五群に分けられる。仙覚が引く古点をはじめ写本にもみられるA「アシイタ」のほか、仙覚『万葉集註釈』で採用された「アナヘク」や賀茂真淵『万葉考』の「アシナヘ」のBナヘ系、鹿持雅澄『万葉集古義』で採用されたC「アナヤム」などが近代以前では行われていたが、井上通泰『万葉集新考』でD「アシヒク」の訓が提示されて以降、これに近現代では追随する注釈書が多い。

森本（一九三七）は、この「足痛」「足疾」について、「第四句さへ解ければ、永い間の難解歌も謎がほどける」（二二頁）とし、「痛」「疾」の字の万葉集中の訓の用例から訓釈を検討した結果、ほとんどの訓を否定して新たに「アシイタキ」と訓じたが、最終的には一二八歌は同一時の贈答歌とみるのが誤りではないか、という私見を呈するに至る。その考えを否定し去ることはできないが、結果的に謎をほどくのを放棄しているように読めてしまう。万葉集中の訓の類例に基づいて検討することによってそういった見解に至るのであれば、万葉集中に類例がなくとも「足痛」は義訓であると考えて訓を検討した方が、合理的な解釈に到達しうると考えられる。

そこで、本稿では、「足痛」「足疾」がどのような足の状態を指すかという、従来重視されてこなかった観点から、消去法ではなく積極的に訓の候補を検討する。

三二―「足痛」「足疾」の状態

「足痛吾勢」という第四句は、「葦若末乃」という第三句と少なくとも何らかの関連を持つものとして解釈されている。契沖『万葉代匠記』（精選本）で「蘆筍ハ白クテ細クウツクシキ物ノ、柔ラカニ弱ケレハ、仲郎カウツクシキ足ヲヤムニヨソフルナリ。」（四七三頁）とあり、少なくともアシ（葦）とアシ（足）が掛けられているという認識は多くの注釈書が示す。すると、先に引用した近藤芳樹『万葉集註疏』のように、「葦若末」に付帯する柔らかさのイメージが「足痛」のたとえと考えることにも無理はないように思われる。その場合「足痛」とは、疼痛があり、足が柔らかくなる、すなわち下肢に力が入りにくい状態であったと考えられる。一般に、「麻痺」という状態には、末梢神経障害により力が入りにくくなる弛緩性麻痺と、中枢神経障害により力を抜きにくくなる痙攣性麻痺とがあるが、この場合、足の状態は前者であると考えられる。

「足痛」が示す足の状態について、契沖『万葉代匠記』（精選本）をはじめ、『和名類聚抄』の「蹇 阿之奈閉」を引くものが多い。契沖『万葉代匠記』（精選本）、鹿持雅澄『万葉集古義』は具体的に脚気であると指摘している。具体的な疾患名が指摘されるのはこの脚気のみであった。一方で医師でもある井上通泰は『万葉集新考』で「もし脚気の事ならば多くは痛むものにあらねばなり」（五二頁）と「痛」字が使われる不自然さを指摘している。『万葉集新考』の該当箇所は脚気の原因をめぐるいわゆる脚気論争のさなかに書かれており、井上通泰も当時の脚気患者を念頭に記したものであると思われる。ただし万葉集当時の脚

気は、痛みが生じうるものとしてとらえられていた可能性がある。半井家本『医心方』卷八の「脚氣論」は「諸病源候論」をひいて「其状自分膝至脚有不仁或苦痺或淫々如虫行所縁或脚指及膝脛洒々爾、脚或屈弱不能行或微腫或酷冷或疼痛或緩縱不隨或攣急（以下略）」（傍線は筆者による）として、疼痛、麻痺等の症状を挙げている。また、服部敏良（一九四五）は、天平十六年に安積親王が「脚病」で薨じたという『続日本紀』の記述は脚氣であるとする。当時、身分の高い人物でも脚氣の罹患は考えうるものであること、疼痛に加えて麻痺によって下肢に力が入りにくいために歩きにくいという状況が生じうることから、「足痛」がさす状態として脚氣説は十分に考えられる。

ほかに当時の足の病氣として、榮原永遠男（一九八七）は、正倉院文書中で写経生が休暇申請をする自身の病氣のうち、赤痢等の腹部症状を呈する疾患に次いで「足病」があるという。「たちまち足病発し、立居安からず。しかのみならず、やや日を経るごとに、痺痛いよいよ増す」（二二〇頁、傍線は筆者による）とする文書を挙げ、職業病であるとしている。座った状態で長時間過ごすという労働環境を考えると、坐骨神経痛、腰椎椎間板ヘルニア等が候補にあがる。「痺痛」のうちの「痺」の内実が不明であるが、「痛」と合わせて生じている点が注目される。

このように「足痛」という表現には、具体的な病名の特定は不可能であるとしても、足の疼痛だけでなく、足の麻痺も同時に存在するような疾患が念頭にあった可能性が考えられる。そしてこの一二八歌の場合、その麻痺は下肢に力の入りにくい弛緩性麻痺であったと考えら

れる。

三―二―「足痛」の訓として何が適当か

森本（一九三七）が考察したように、「痛」の字義や既存の訓からはアイタ系の訓しか導けない。「中国基本古籍庫」で唐を含む唐以前の「足痛」の例を検索すると二十例に満たず、用例には西晋の『甲乙経』、隋の『諸病源候論』などの医学書もあるが、いずれも単純に足の痛みについて述べたものである。⁵アイタ系の訓は、素直な訓であるだけに、先行する諸注釈でもこの訓を否定することはしていない。しかし、右で見たように、力の入りにくさなどの含意はないので、積極的には採用しにくい。Cナヤム系、Eその他（アシヤム、アルヘク）も、同様である。

訓の候補として検討したいのは、「アシ○○」という形で足の病的な状態や疾患を表す複合語であるが、その数は多くない。『医心方』卷八「手足」は手足の疾患を二四節に分けて述べるが、うち一五節までが脚氣について述べる。他の九節のうち「足○○」「脚○○」形式の見出しは「脚腫」（コヒアシ）のみであり、『医心方』卷八全体の本文の訓として見える「アシ○○」は「攣」（アシナヘ）のみであった。古辞書等に見える「アシ○○」という複合語には、『和名類聚抄』の「脚氣」に対する「阿之乃介」（アシノケ）、「蹇」に対する「阿之奈閉」（アシナヘ）があり、他の訓の候補として『訓点語彙集成』に「擲」（アシスリ）、観智院本『類聚名義抄』に「蹶」（アシヨル）、「跋」（アシヨレ）がある程度であった。

翻って一二八歌の諸注釈の訓のうち、足の状態についての含意があるのは、Bナヘ系、Dヒク系の二つである。Dヒク系は古辞書等の訓に見えないものではあるが、足の状態を表す表現として候補に挙がるため、以下にこの二つの系統がそれぞれ訓として適当かどうか検討する。

《Bナヘ系》

諸注釈において、ナヘと訓じる根拠として古辞書の用例を挙げている。『和名類聚抄』元和本卷三に「蹇 説文蹇〈音犬訓阿之奈閉／此間云那閉久〉」とあり、『新撰字鏡』（天治本卷三）に「癖 正亦反入腹内癖病□足奈戸」とある。観智院本『類聚名義抄』には「蹇」「躓」「跛」「痿」にアシナヘという訓が見られた。古辞書以外には、半井家本『医心方』巻八に「躓」に「アシナヘ」「ヒキ」の訓がある。また『東大寺諷誦文稿』に「躓躓多来」とあり、「躓」に「テナヘ」とあることから、中田祝夫（一九七九）は「躓」を「あしなへ」と推定して読んでいる。「ナフ」もしくは「ナヘグ」という動詞は、『時代別国語大辞典上代編』で「なえる。しびれて感覚がなくなる」（五三〇頁）という意味とされる。「痿」の訓としてアシナヘがあることから、どちらかといえれば弛緩性麻痺を連想させる語であると推測でき、「足痛」の訓の有力な候補と言える。

ナヘ系には大矢本、陽明本、仙覚『万葉集註釈』がとる「アナヘク」と、賀茂真淵『万葉考』がとる「アシナヘ」とがある。「アナヘク」について、沢瀉久孝が『万葉集注釈』で「枕詞のアシとの接続も不明に

なる」（一二八頁）とするのは首肯でき、「足」は「アシ」と訓じた方がよいと思われる。「アシナヘ」については、鹿持雅澄『万葉集古義』で「吾勢と体言につづきたれば、必ず用言に訓ずては、協はぬことなり」（四五二頁）のように連用形であることを理由に斥けられているが、連体形「アシナフル」「アシナヘグ」とすると音数が合わなくなってしまう^⑥。一方で、土屋文明『万葉集私注』は「アシヒキ」と訓じたうえで、「この語は次のワガセと同格であるからアシヒキとすべきで、修飾語としてアシヒクと訓んだのでは、全体の調子がだれてしまふ。或は蹇の意とみてアシナヘと訓むのも一理あらう。其の場合もアナヘグと修飾語に訓むべきではない。どこまでもワガセと同格の呼びかけである」（二二二頁）とし、連体形よりもむしろ同格ととって接続するべきと述べた。土屋文明以外に「アシナヘ」と訓じる賀茂真淵『万葉考』、安藤野雁『萬葉集新考』などにおいては、活用形に関する言及はないが、「アシナヘ」と同格として「ワガセ」に接続する形式を許容しているものと考えられる。

これから、Bナヘ系は訓の候補であり、その場合、「アシナヘ」が好ましいと考えられる。

《Dヒク系》

諸注釈において、ヒク系で訓じる根拠として、山田孝雄『萬葉集講義』（巻二、一三九―一四〇頁）では、枕詞「あしひきの」を「足疾乃」（4・六七〇）、「足病乃」（7・一二六二）と書く例を挙げている。井手至（二〇〇九）は、「あしひきの」の「ひく」は四段動詞の「引

「く」ではなく上二段動詞の「攀く」であると指摘し、この「ひく」は「ひきつる」意とした(同二三三頁)。この場合、「ひく」はどちらかといえば力が抜けない痙性麻痺を連想させる語であると推測できる。ただし右に引用したように、半井家本『医心方』卷八に「攀」に「アシナヘ」「ヒキ」とあることから、「ナフ」「ヒク」が筋肉の緊張度合いで厳密に使い分けられていたかは不明である。また、元和本『和名類聚抄』、観智院本『類聚名義抄』、天治本『新撰字鏡』、『訓点語彙集成』から「アシ」を含む複合語で足の病態を示す語を抜き出してみると「アシナヘ」はあっても「アシヒキ」はない。このことからDヒク系は、Bナヘ系と同様足の状態についての含意はあるが、この歌の訓の候補としての優先度は下がる。

以上より、足の様相として弛緩性麻痺を連想しうる「アシナヘ」が訓として最も適当であると考えられた。この訓は第三節に述べる典拠を踏まえても蓋然性が高いものと思われる。

第一、第二、第五句の訓については、諸写本、諸注釈の間で細かい異同はあるが、おおむね一致しており、異同により歌の解釈の大勢には影響しないと考えられることから、先行する訓に従っておく。本稿の考える本文と訓を掲げる。

わがききし みみによくにる あしのうれの あしなへわがせ つ
とめたぶべし

吾聞之 耳尔好似 葦若末乃 足痛吾勢 勤多扶倍思

四、典拠としての『遊仙窟』

本稿は、三宅(二〇一九)の論に拠りつつ、一二八歌も『遊仙窟』を典拠としていると考えられることを主張する。そこで一二六―一二八歌の歌群に対する典拠に関する先行研究を検討し、次いで『遊仙窟』を典拠として解釈できることについて述べる。

四―一、先行する典拠論

一二六―一二七歌について、小島(一九八八)では、『文選』『玉台新詠』等をもとに長大な左注を作ったものと見る。「東隣」表現に宋玉「登徒子好色賦」等、「自媒」表現に『遊仙窟』等の関連を指摘した。そのうえで、一二八歌について、「登徒子の妻の「旁行」の記事に暗示を得て、戯れて作ったものではなからうか」(同九一五頁)とする。「旁行」とは、登徒子の妻が腰をまげてたどしく進むさまを表す「旁行踴儻」の箇所を指す。石川女郎が貧女に似せてたどしく歩く「踴足」の部分との類似性が指摘されており、足の不自由さの連想から一二八歌が創作されたとみているが、一二八歌そのものの典拠の指摘はない。

先行研究で一二六―一二八歌の典拠として挙げられるのは、宋玉「登徒子好色賦」(小島憲之等)、司馬相如「美人賦」(胡志昂等)、『遊仙窟』(三宅香帆等)である。いずれも一二六歌左注の語句との関連だけでなく、一連の贈答歌との関連にも言い及んでいる。

・宋玉「登徒子好色賦」『文選』

楚王の前で、登徒子が宋玉のことを好色だといったことに對して、宋玉が反論するものである。宋玉は、東隣に住む美女からの誘いを受け入れないことで好色を否定した。登徒子の妻は、髪が乱れ、耳はつぶれ、唇は薄く、齒は欠け、足はふらつき、背は曲がっていて、疥癬の上に痔であるとされるが、その妻を愛して子をなしている点で東隣の女性との対照がなされている。宋玉が美女の誘いを受け入れないという図式は、一二七歌の大伴田主の歌に通じるものがある。東隣の女性や、足がふらついているようなさまは、一二六歌の左注の描写とも重なる。

「登徒子好色賦」のみを典拠とする際の問題点について、三宅（二〇一九）は次のように指摘した。大伴田主が一二七歌において「登徒子好色賦」を念頭においた場合、宋玉＝大伴田主、東家之子（東隣の女性）＝石川女郎となる。石川女郎の立場に立つと、女性が男性と結ばれているのは、東家之子ではなく登徒子の妻の方（登徒子＝大伴田主、登徒子の妻＝石川女郎）であり、そのために登徒子の妻を彷彿とさせる姿や歩き方の描写が入ったと考えられる。しかし、「貧女」と名乗った理由、「塙子」を持つてきた理由などが明らかにできないという。

他に、一二六歌左注と「登徒子好色賦」との相違点について、福沢健（一九八六）は、石川女郎が大伴田主の家に押しかけること、女郎が姫に扮することの二点を挙げる。一二八歌を含めた解釈のために、原伝承としての姫の恋愛譚を指摘し、この一二八歌は、一二六―一二七歌が口誦される中で、享受者の興味が恋愛譚にうつったことで増補さ

れた歌であると考察した。この説を否定することはできないが、それでもなお三宅（二〇一九）が指摘するように、「貧女」と名乗った理由、「塙子」を持つてきた理由などが明らかにできない。

・司馬相如「美人賦」

梁王の前で、鄒陽が司馬相如のことを妖麗不忠だといったことに對して、司馬相如が反論するものである。司馬相如は、東隣に住む美女からの誘いを受け入れないことで好色を否定した。

司馬相如「美人賦」は一二七歌の下敷きとしての指摘がある。胡志昂（二〇一七）は、司馬相如関連の記述を集めることで一二六―一二八歌全体の解釈を試みた。司馬相如が「風流士」（一二六歌）、「遊士」（一二七歌）の両方の評価をされていることを踏まえ、『史記』等に見える司馬相如と卓文君の結婚譚が典拠となつているとする。未亡人で貧しい卓文君が司馬相如と駆け落ちし、酒を温める火炉にあたらせた（『史記』『漢書』）。後に裕福になると、司馬相如が卓文君の風流さにおぼれて持病の消渴（糖尿病）が悪化して死去した（『西京雜記』）とする。一二六歌左注は、石川女郎＝卓文君（炉にあたらせてほしい）という図式、一二七歌は「美人賦」をもとに大伴田主＝司馬相如として東隣の美女を拒否する。一二八歌は、足疾により拒否されたという解釈を提示することで、自分を卓文君になぞらえることを再度主張するという解釈を提示した。

しかし、「足疾」から「消渴」という連想は、やや無理があるように思われる。消渴が糖尿病病であるという仮定をおいたとして、一般的に

糖尿病の発症から末梢神経障害を起こすまでには十年単位の年月が必要であり、さらに足が不自由になるほどまで進行するには当時の寿命が足りないのではないかと考えられる⁷⁾。そのため一二八歌で「足痛」「足疾」を歌いこんでも、大伴田主に「司馬相如の消渴」を喚起させる、もしくは享受者にそう気づかせることは困難であると考えらえる。つまり、一二八歌の典拠に司馬相如の故事を使用していたとは考えにくい。

・『遊仙窟』

『遊仙窟』は、一二六歌左注の「自媒」の用例として小島（一九八八）で指摘されている。『遊仙窟』を二二六―二二七歌の典拠として、「登徒子好色賦」のみでは解釈しきれない部分の解釈を試みたのが、三宅（二〇一九）である。

「火を取る」ことについて、張郎と十娘が近くにある銅熨斗をもとにして詠んだ詩の掛け合いを挙げる。『遊仙窟』には火熨斗（銅熨斗）に火がないので気持ち冷めているという十娘の詩がある。火を愛情に見立て、火をもらいにくというのは、すなわち「愛情を入れてください」という意思表示であるという解釈が提示された。続いて、持つて行った「鍋子」について、「鑑子」という鍋をもとにした詩を挙げる。この詩は「あなたの考え次第で、契りを結ぶことを私は承知します」（八木沢敬『遊仙窟全譜』一二九頁）という意思表示であるとされ、その鍋を持っていくことで、『遊仙窟』という典拠を提示する意図があると解釈している。

三宅（二〇一九）による典拠の解釈は次のようになる。一二六歌左注において石川女郎は、鍋を持って火をもらう、すなわち愛情をもらいにいくという『遊仙窟』を典拠として行動にでた。歩き方や「東隣」の表現からは、『文選』の登徒子夫婦のようになることを期待した。ここで『遊仙窟』と『文選』の二つの典拠が踏まえられている。これに對して一二七歌において大伴田主は、東隣の美女を断ることで、宋玉に自らをなぞらえており、『文選』のみを典拠として応答しており、典拠のずれがあったと指摘した。三宅（二〇一九）の論は先行する典拠に比べて破綻が少ないと考えられるが、『遊仙窟』という典拠が一二八歌にまで及ぶかどうかには言及していない。

四二二、『遊仙窟』と「アシナへ」

右のように、「登徒子好色賦」や「美人賦」だけでは一二八歌までを包括する典拠としては問題があると考えられた。三宅（二〇一九）、胡（二〇一七）はいずれも一二六歌と一二七歌との間に、典拠のずれがあることを指摘しており、胡（二〇一七）は一二八歌で、ずれを認識した石川女郎が典拠の再提示をしていると解釈している。この典拠の再提示という図式は妥当であると考えられる。これを三宅（二〇一九）に適用すれば、一二八歌において石川女郎は、自身の行動があくまで『遊仙窟』をも典拠としていることを再提示し、アピールしようとすると考えられる。

その典拠と思われるのは、三宅（二〇一九）も指摘していた「鑑子」を歌った詩である。該当箇所は八木沢敬（一九六七、一二七―一二八

頁)による本文と訳を掲げる。

十娘忽見鴨頭鑑子、因詠曰、

背長非^レ為^レ嘲

項曲不^レ由^レ攀

但令^二脚直上^一

他自眼双翻

十娘は突然鴨の頭の形をした爛鍋を見て、歌をよんだ。

かななべの口の長きは、ただ吸はんためにはあらず。

そのうなじ曲がりて長きは、ただ抱かんためにはあらず。

その足を真上にあげなば、そのままに倒れ臥しなん。

この詩に詠まれている「鑑子」に注目する。『遊仙窟』の諸本では、醍醐寺本で「サラナヘ」、真福寺本「サスナヘ」、陽明文庫本「サスナハ」の訓が付されている。「鑑子」について岩波文庫『遊仙窟』の注に、「鑑」は、釜のたぐい。ただ、耳と足がある」(二七〇頁)とする。つづけて、『和名類聚抄』の記述(元和本卷十六、鑑「唐韻云鑑(音倉字亦作鑑漢語抄云阿之奈倍(以下略)」)を引用し、アシナベという訓があることを指摘した。新井白石『東雅』では、鑑(アシナベ)について、「耳足ある器と見えたり」とする。アシナベ(アシナヘ)という語については、観智院本『類聚名義抄』の「鑑」「鑑」「鑑」にアシナヘの訓があり、「鑑」にもアシナヘとあるが、「ヘ」に濁声点がみられる。すなわち、『遊仙窟』諸写本には「アシナヘ」の訓は見られないものの、

「鑑」と「アシナヘ」とは対応しうる訓であることが分かる。

当該一二八歌には、「耳」「足」が詠みこまれ、第二節でみたように「足痛」の訓として「アシナヘ」が考えられた。すなわち、一二八歌には、「アシナヘ(足鍋)」を想起させるための語がちりばめられていると言える。三宅(二〇一九)によれば鍋を持つていくことが、典拠の提示であったのであるから、一二七歌で典拠のずれが明らかになった後には、なおさら典拠の象徴たる鍋のことを詠むことが、応酬としては自然な形となると考えられる。

ここで「足痛」を「アシナヘ」とよんで「足鍋」に掛けることができるかが問題となる。

まずナベのべは乙類であり、ナフは下二段動詞なので活用形のナヘは乙類である。次に清濁について、ナベは『時代別国語大辞典上代編』(五三二頁)ではナ(菜・魚)＋ヘ(釜)であろうとする。このヘ(釜)は複合語では必ずしも濁っていない(例：鼎カナヘ)。『和名類聚抄』の「鍋」の項目には「奈閉」とあり、「倍」の字を使う場合は濁音か清音かはっきりしないが、「閉」「戸」を使う場合は清音と考えられ、アシナヘという清音である可能性もある。さらに、遠藤邦基(一九八九)は、上代の掛詞では清濁が混在しないことを述べたうえで、「清濁の両音が――^マ奈良時代も中期にはこの区別が急速に曖昧化したことは、万葉集でも第四期後半の作品や、正倉院仮名文書にその書き分けがないことであきらかである」(二〇頁)とする。一二六―一二八歌が、増補されたものであるならば、清濁がやや曖昧でも許される可能性がある。以上から、遊仙窟の現存写本の「鑑子」に「アシナヘ」訓がない点

が弱点ではあるが、「アシナへ」に「足痛」と「足鍋」の二つがかけられており、その足鍋が典拠の再提示であるとみれば、第三節の「足痛」に対する「アシナへ」訓との整合性が高まり、典拠として『遊仙窟』を想定する蓋然性が高まると考えられた。

四―三、典拠を踏まえた歌の解釈

諸注釈と同様、第三句は「足痛」にかかるものと考えられる。同音の「葦」と「足」、「葦若末」と「足痛（アシナへ）」とは柔らかさの共通点を有していると考ええるのは第三節でみたとおりである。典拠を踏まえて、解釈について二点を追記する。

一つに、「塙子」（土鍋）と「鑑子」（足鍋）の違いである。三宅（二〇一九）の解釈では、石川女郎が持つて行った「塙子」には、火（愛情）を入れる銅熨斗の含意と、契りを結ぶことを承知し典拠を提示する「鑑子」の含意があることになる。しかし一二七歌においてその『遊仙窟』の典拠は知ってか知らずか無視されている。「塙子」（土鍋）と「鑑子」（足鍋）とは材質も形状も異なるため、単純に典拠が伝わっていないかった可能性もある。金属製の「鑑子」（足鍋）が当時の程度普及していたのかは不明であるが、形状等の知識は少なくとも持つていたであろう。普及していたとしても金属製のものをもって訪問するのは現実的ではなく持ち運びやすい「塙子」（土鍋）で代用したものと思われる。

第一句「吾聞之」、第二句「耳尔好似」は、諸注釈では「噂で聞いている」と解釈され、その内容は伴田主の足の疾患を指すとされる。し

かし「耳」に「似る」という表現で、「噂」を指すコロケーションは、「日本語歴史コーパス」中に見られず、少なくとも一般的な表現とはいにくい。そのため、単純に形状として「耳」に似ている、という意味である可能性も考えられる。その場合、葦若末と耳とは現実問題として似ていないので、一句挟むことにはなるが、耳（把手）と足がついている足鍋の形状に似ているという意味とも考えられる。すると第二句は形状のたとえで足鍋を、第三句は性状のたとえで足痛をそれぞれ導いていると考えられる。そして「吾聞之」の内容は足の疾患ではなく、「鑑子」の形状について「こう聞いたことがある」という意味ともとらえることができ、「塙子」（土鍋）によって「鑑子」（足鍋）という典拠を示そうとしたことをより明示的に伝えることで、相手を揶揄しているともとらえられる。

もう一つは、「アシナへ」のもつ含意が、一二六歌左注と一二八歌との間で重なりつつもずれが生じていることである。三宅（二〇一九）の解釈によれば一二六歌において、「塙子」（土鍋）を提示する意図は、契りを結ぶことを承知する『遊仙窟』の漢詩の「鑑子」（足鍋）を彷彿とさせることにあった。ただ一二六歌の左注の中では、伴田主の「足疾」をうかがわせる描写はなく、伴田主はその時点で「足疾」のために不自由であったとは断定しにくい。この時点では単に典拠の提示という意味合いであったと思われる。しかし典拠の提示がうまくいかなかったため、右に述べたように一二八歌の「足痛」までの箇所では、アシナへ「鑑子」（足鍋）という典拠の再提示を行った。この点で一二六歌と一二八歌とで「アシナへ」による典拠の再提示という含意は共

通する。

一方で、一二八歌の第四句、第五句は、典拠として提示したアシナへ（足鍋）をアシナへ（足痛）へと読み替えて、それを見舞う表現となっている。ここには、当該の漢詩が、八木沢による『遊仙窟』の解説中に「相当露骨で、煽情的な匂いが強」（二二九頁）いとされることに関連する。典拠に用いた足鍋の三本足の鍋の足がいたんでいるというの、性的な不全を暗示し、それを揶揄しているとも解釈しうる。これについては、沢瀉久孝『万葉集注釈』で「この「足」が歩く「あし」ではないといふうがった説をどこかで見たやうに記憶する」（一二八頁）といい、伊藤博『萬葉集釈注』で「足ひく」に男の最も大事な「足」に活力がないことをもに扱っているとすればまことに痛快きわまる」（三〇九頁）とあるのと同様の意図である。この二注釈には引用した以上の記述や根拠が示されておらず、一二六歌に付帯する揶揄という文脈からこの解釈を導いているのであろう。ここへ足鍋を補助線に据えると、二注釈のような解釈にも一定の蓋然性があると考えられる。ただしこのアシナへの読み替えは、一二六歌左注の時点では想定していなかったことであり、一二七歌という典拠からずれた返答があったからこそ行ったものと考えられる。「双栖之感」を抱いて訪問したことから、そもそもそうした不全は存在したとは考えにくい。にもかかわらずそのような揶揄に終わるところには、石川女郎の意図が達成しなかったことに対する腹いせがあるにしても、やや矛盾があり面白みが感じられる。

この一二六～一二八歌には、「譚戯性、戯咲性」の指摘がある。小島

（二九八頁）は「この一群の贈答歌は、事実をよんだものかも知れないが、左注によつて考へると、中国文学に暗示を得たフィクション的小説的な構成をもつ」（九一五頁）、「一二六の左注の「贈譚戯」の「譚」[戯]の文字、或いは「贈」「報贈」歌の形式などは卷十六の戯咲歌を思はせる」（九一九頁）とし、藏中進（一九七七）も「卷十六の戯咲歌に直結し、さらに平安期に入つて歌物語にも接続するものである」（一〇一頁）とする。本稿の解釈を踏まえても、この指摘は依然妥当であると考えられる。

このように、一二八歌には、一二六～一二七歌の応酬をうけて、石川女郎が足鍋を用いて『遊仙窟』の典拠を再提示したいという意図と、足鍋にかけられた「足痛」（アシナへ）を見舞うような投げかけをしつつも痛烈に揶揄するという意図とをくみ取ることができる。その点で、一二六～一二八歌は一貫した典拠に沿った一連の歌群として見る事ができる。

五、おわりに

本稿は、石川女郎と大友田主との間の贈答歌である一二六～一二八歌のうち、一二八歌について、訓異同の検討を行い、『遊仙窟』が典拠である可能性を示した。

この歌群が『遊仙窟』を典拠とした場合について、藏中（一九七七）は次のように述べる。

中国文学との関係について、もし『遊仙窟』もその中に加えることができるなら、またその渡来がいわれているがごとく山上憶良帰朝時であるなら、(筆者補…一二六―一二八歌の)左注は慶雲ころ以後の作と考えるべきかと思われる。卷二の配列順によって一群の作が慶雲ころの作と断じてよいなら、逆に『遊仙窟』の渡来を推す資料ともなるであろう。(二〇二頁)

慎重に述べているが、引用文前半の『遊仙窟』を典拠とすることについては、三宅(二〇一九)と本稿とを組み合わせることで可能性が高まったと言える。そのこと自体に対する解釈は、この歌群の作歌時期、編纂論に対する見解で変わりうる。阿蘇瑞枝(二九九九)は文武三(六九九)年以前の作歌とし、橋本達雄(二〇〇六)は「大伴関係歌は原萬葉には採られなかったらしく」「増補の後に、さらに大伴関係者によつて追補されたものと考えられる」(同三六頁)とし、大伴家持を中心とする編纂のころの追補とみる。本稿はこうした問題には立ち入らないが、卷十六の戯咲歌との関連もあわせて、この歌群はこうした問題を検討する材料として、また卷二における『遊仙窟』利用の可能性を示唆するものとして有用であると考えられる。

注

- (1) 井手至、毛利正守校注『新校注万葉集』に拠った。読みやすさのため、「*」などの記号は省略し、訓は平仮名に直した。

- (2) 岸本由豆流『万葉集攷証』、木村正辞『万葉集美夫君思』のように本文を「若未」とし、「若」が「カ」、「未」が「ビ」の仮名であるとする注釈もあるが、それぞれ万葉集中にそのような仮名用例はなく、従いがた

- (3) 鹿持雅澄は「足痛」を「アナヤム」と訓じているが、葦若末にやわらかさの意味を付帯させている点で共通している。

- (4) e 国宝の画像を閲覧した。翻刻は筆者による。

- (5) https://emuseum.nich.go.jp/detail?langId=ja&webview=&content_base_id=100173&content_part_id=0&content_pict_id=0 (二〇二四年一月五日閲覧)

- (6) 例えば『医心方』にも引用される『諸病源候論』の卷一風病諸候上に「養生方導引法云、左右拱手兩臂不息九通治臂足痛勞倦風痺不随」とあるように、麻痺(不随)について述べた章ではあるが、この「足痛」は手と足の痛みについて言及したものと考えられる。

- (7) 「アシナフルワガセ」と「アシナヘグワガセ」は、いずれも八文字で第四句の字余り句となる。ただし、「ワガセ」が「アガセ」であった場合、「アシナフルアガセ」の母音音節「ア」は、五音節目の第二母音以下にあたり、字余りA群の位置にある(佐野宏(二〇〇五)を参照)。アガセと施訓した場合には字余り法則上は許容されるため、施訓としては連体形の訓と、ワガセからアガセへの改訓をセットにすれば定型上の問題は解決できる。しかし、「我が背」の意味で「アガセ」とする例が万葉集中にみられないため、この訓は採用しづらい。よつて連体形とするこの二つの訓は採用しづらいことになる。

- 國松、戸田(二〇一五)は古医書に挙げられる消渴の症状を述べるが、その中に足病変はない。

参考文献

- 《テキスト、諸注釈》
- 井手至、毛利正守校注（二〇〇八）『新校注万葉集』和泉書院。
- 伊藤博（一九九五）『萬葉集釈注』一、集英社。
- 稲岡耕二（一九八五）『万葉集全注』巻二、有斐閣。
- 井上通泰（一九一五）『万葉集新考』巻二上、歌文珍書保存会。
- 沢瀉久孝（一九八三）『万葉集注釈』（普及版巻二）中央公論社。
- 賀茂百樹増訂（一九二七）『賀茂真淵全集』巻一増訂、吉川弘文館。
- 鹿持雅澄著、国書刊行会編（一九四三）『万葉集古義』第一、大観堂出版。
- 岸本由豆流（一九二五）『万葉集攷証』巻二、（万葉集叢書第五輯）、古今書院。
- 木村正辞（一九二九）『万葉集美夫君思』巻二上、光風館。
- 倉野憲司、武田祐吉校注（一九五八）『古事記 祝詞』（日本古典文学大系第一期一）、岩波書店。
- 近藤芳樹（一九一〇）『万葉集註疏』二の上、歌書刊行会。
- 佐佐木信綱編（一九二六）『仙覚全集』（万葉集叢書第八輯）、古今書院。
- 武田祐吉、土屋文明（一九三五）『万葉集総釈』第一、楽浪書院。
- 橘守部著、折口信夫校訂（一九二四）『万葉集檜嬢手』（万葉集叢書第三輯）、古今書院。
- 今書院。
- 張文成作、今村与志雄訳（一九九〇）『遊仙窟』岩波書店。
- 土屋文明（一九八二）『万葉集私注』新装版一、筑摩書房。
- 久松潜一監修（一九七三）『契沖全集』巻一卷、岩波書店。
- 八木沢元（一九六七）『遊仙窟全講』明治書院。
- 山田孝雄（一九三九）『万葉集講義』巻二、宝文館。
- 《研究論文等》
- 秋山虔（一九八四）「みやび」の構造」相良亨・尾藤正英・秋山虔編『講座日本思想』第五巻、東京大学出版会。
- 阿蘇瑞枝（一九九九）「石川郎女の歌」神野志隆光・坂本信幸編『セミナー万葉の歌人と作品 第一巻初期万葉の歌人たち』和泉書院。
- 井手至（二〇〇九）『遊文録 萬葉篇第二』和泉書院。
- 稲岡耕二（一九八二）『万葉集巻二訓詁存義（その一）』『論集上代文学』第十集。
- 犬塚旦（一九五七）「みやび攷」『芸林』八（四）。
- 遠藤邦基（一九八九）『国語表現と音韻現象』新典社。
- 國松佳子、戸田静男（二〇一五）「消渴について 古医書からの一考察」関西医療大学紀要九。
- 藏中進（一九七七）「石川女郎・大伴田主贈報歌」伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ第二集』有斐閣。
- 胡志昂（二〇一七）「石川郎女と大伴田主の贈報歌群を巡って」『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』一七。
- 小島憲之（一九八八）『上代日本文学与中国文学 中（再版）』塙書房。
- 榮原永遠男（一九八七）『平城京住民の生活誌』岸俊男編『日本の古代9都城の生態』中央公論社。
- 佐野宏（二〇〇五）『萬葉集の字余りと脱落想定表記―定型に対する共通了解の観点から―』『萬葉』一九三。
- 中田祝夫（一九七九）『改訂新版 東大寺諷誦文稿の国語学的研究』風間書房。
- 橋本達雄（二〇〇六）『万葉集の編纂と形成』笠間書院。
- 服部敏良（一九四五）『奈良時代医学史の研究』吉川弘文館。
- 福沢健（一九八六）「石川女郎・大伴田主贈報歌の形成」『美夫君志』三三。
- 三宅香帆（二〇一九）「石川女郎大伴田主贈答歌に見る『遊仙窟』の影響―二人の『風流』をめぐる―」『人間・環境学』二八。
- 森本治吉（一九三七）『萬葉巻二「足痛吾勢」の訓釈』『国語と国文学』一四（一）。
- 山田孝雄（一九五五）「うれ」の考』『万葉集考義』宝文館。